The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	定量分析による海外フィールド・スタディの高度汎用力育成効果の検証：マレーシアにおける海外研修プログラムの事例報告
Author(s)	辻田, 那月; 小川, 歩人; 田島, 知之 他
Citation	Co* Design NOTE. 2025, 7, p. 1-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/101378
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Co* Design NOTE
Center for the Study of Co* Design, Osaka University

No. 07

2025 年 5 月 16 日

定量分析による海外フィールド・スタディの高度汎用力育成効果の検証：マレーシアにおける海外研修プログラムの事例報告

Author

辻田 那月　（大阪大学学際大学院機構）
小川 歩人　（大阪大学学際大学院機構）
田島 知之　（大阪大学COデザインセンター）
許 俊卿　（清華大学新聞与伝播学院）

CENTER FOR THE STUDY OF CO* DESIGN
大阪大学COデザインセンター
大阪大学 OSAKA UNIVERSITY

定量分析による海外フィールド・スタディの高度汎用力育成効果の検証

辻田 那月　（大阪大学学際大学院機構）
小川 歩人　（大阪大学学際大学院機構）
田島 知之　（大阪大学COデザインセンター）
許 俊卿　（清華大学新聞与伝播学院）

Verification of the Effectiveness of Developing Advanced Transferable Skills through Overseas Field Study: A Quantitative Analysis

Natsuki Tsujita (Institute for Transdisciplinary Graduate Degree Programs, The University of Osaka)
Ayuto Ogawa (Institute for Transdisciplinary Graduate Degree Programs, The University of Osaka)
Tomoyuki Tajima (Center for the Study of CO*Design, The University of Osaka)
Junqing Xu（School of Journalism and Communication, Tsinghua University）

本研究では、超域イノベーション博士課程プログラムのカリキュラムの一つである「海外フィールド・スタディ」によって、高度汎用力の涵養が行われるのかを調査することを目的とした。2023年度はマレーシア・サバ州において10日間の実習を実施した。研究対象者は10名である。高度汎用力の変化を見るために、「独創的な解決策を構想する力」な

どの10項目を5件法の自己評価で回答させた。また現地滞在中はその日の活動のふりかえりを目的に、毎日ふりかえりシートを配布し、記入を求めた。質問は「新たな発見や価値観の違い、興味の深まりについて」などの4項目であり、いずれも自由記述形式とした。高度汎用力についてはウィルコクソンの符号順位検定を行い、ふりかえりシートについては計量テキスト分析を行った。分析の結果、高度汎用力が上昇したという自己評価は認められなかったものの、毎日のふりかえりの記述から、学生たちは自身の生活や環境とは異なる国に滞在し、現地の方々と交流した経験を元に、新たな課題を見つけるためのスタートラインに立ったことが窺える。こうした実習の教育効果については、参加者による主観的な自己評価ではない、第三者による客観的な評価手法についても検討する必要があるだろう。

This study aimed to investigate whether the "Overseas Field Study," a component of the Cross-Boundary Innovation program curriculum, fosters advanced transferable skills. In 2023, a 10-day field study was conducted in Sabah, Malaysia, involving 10 participants. To measure changes in advanced transferable skills, participants completed self-assessments using a five-point Likert scale for ten items, including "the ability to conceptualize creative solutions." Additionally, during the field study, daily reflection sheets were distributed to capture participants' thoughts on activities. These sheets included four open-ended questions focusing on topics such as "new discoveries, differences in values, and deepening interests." For advanced transferable skills, the Wilcoxon signed-rank test was conducted, and for the reflection sheets, quantitative text analysis was performed. Analysis revealed no significant increase in self-assessed advanced transferable skills; however, daily reflections suggested that participants, through their experiences of staying in a different cultural and environmental setting and engaging with local residents, reached a starting point for identifying new challenges. To further evaluate the educational impact of such field studies, it will be necessary to explore objective assessment methods conducted by third parties, rather than relying solely on participants' subjective self-evaluations.

【キーワード】マレーシア、フィールドスタディ、高度汎用力
【Keyword】Malaysia, Field Study, Transferable Skills

1. 序文

近年、多数の大学で語学研修や短期留学などの海外研修プログラムが行われている。その目的や教育効果の評価方法は各大学によって様々であるが、ほとんどが大学 1〜2 年次に実施されており、また学生に対する成績その他のフィードバックを想定した成果物に対する評価は行われていない（泰松, 2023）。

超域イノベーション博士課程プログラムのカリキュラムの一つである「海外フィールド・スタディ（以下、FS）」は、本プログラムの目的の一つであるグローバルリーダーの育成としてのファーストステップとして位置づけられている修士 1 年次の選択必修科目である。FS では、国境を越えて、異なる文化や価値観に向き合う姿勢を体得し、異なる専門分野を持つ博士前期課程の学生が各々の専門性を生かしながら、グローバルな諸問題を発見し、それらに実践的に取り組む力を養い、そこから自分たちが生まれ育ち、慣れ親しんだ社会や文化を客観的に捉え直すことを目的としている。また、異なる文化的、政治的、社会的、経済的な背景を持つ人びとと問題を共に考え、解決に向かって取り組むために必要なコミュニケーション力、柔軟性といった資質を養うと共に、多角的な視点をもって思考し、複雑な現実のなかで行動できる学生を育成し、諸問題に取り組む意欲を喚起し、より深く現実を見つめる姿勢を養うことを目指している。なお FS の詳細については金森・三田（2019）の既報を参照されたい。本プログラムではこれまで 2012〜2022 年度の間、東ティモールやブータン、インドネシアなど様々な国において FS を実施してきた。

金森・三田（2019）は、FS により社会でイノベーションを起こす力である高度汎用力、具体的には、課題発見力・課題解決力・社会実践力の 3 つから構成される力が向上する可能性を示唆している。その研究では、2012〜2017 年度までの 6 年間に実施した、9 カ国 13 件の FS に関するシラバスや報告書を分析しており、「高い国際性」、「専門以外の分野の幅広い知識」、「他者と協働する力」の 3 つの能力が他の能力と比較して育成されること、また、「物事を俯瞰し本質を見抜く力」、「自ら課題を発見する力」も一定程度能力の向上がみられることを示した。一方で、「課題の解決策を立案する力」、「課題解決の実現に挑む力」、「独創的な能力」、「高度な専門的知識・研究能力」の能力の育成には至らないことも示された。ここで実施されたのは学生が実習内容について記述した内容を読み取る定性的な分析であり、定量的な評価は試みられていなかった。また泰松（2023）は海外研修プログラムの評価について、受講生の主観的記述データをテキストマイニングによって評価する試みは、他の分野でも積極的に進むデータサイエンス活用の流れに沿っており、今後期待できる手法にみえると述べている。そこで、本実習では学生が数値での自己評価を行い、また実習期間中に学生が毎日作成するふりかえりシートの内容について、計量テキスト分析による教育効果の定量的な評価を試みた。

2023 年度の FS は、東南アジアのボルネオ島北部に位置するマレーシア・サバ州におい

て実施した。まず事前学習として、マレーシアの歴史や文化について学び、多文化共生・教育・環境の 3 つの観点からマレーシアの社会課題を見つけるためのグループワークを行った。そして海外実習では、市街地にある水上集落を訪問し、貧困問題等に取り組む団体や学校の活動を視察した。また市街地から離れた農村地域でホームステイを行った。実習参加者は現地大学生を含む 4 名のマレーシア国籍の若者たちと協働しながら、人々の暮らしとそこで直面している課題を体験的に学習し、グローバル化する世界における課題やその解決の方向性を検討した。これらの実習により、これまでの FS では達成できていなかった高度汎用力である、「独創的な解決策を構想する力」「問題解決の実現に挑む力」「独創的な視点で自ら課題を設定する力」「高度な専門的知識・研究能力」などの能力の涵養を目指した。

2. 方法

2.1 活動内容

今回の研修では海外実習に先駆けて、事前学習を 2023 年 10 月から 2024 年 2 月にかけて行った。事前学習ではゲスト講師としてマレーシアの文化・社会に造詣の深い戸加里康子氏や、現地受入団体である Caring for the Future Foundation (CFF) Japan／Malaysia の安部光彦氏、内海研治氏を招へいし、実習地に関する事前講義をおこない、実習に際した心構え（自己紹介、現地協働、敬意をもった関わり）およびリスク管理について研修を行った。また学生の興味関心に基づき、多文化共生・教育・環境の 3 つのテーマに分かれ、マレーシアの社会課題について話し合い、海外実習でのインタビュー内容を検討した。事前学習の詳細を表 1 に示す。

表 1：事前学習スケジュール

回数	内容
1	オリエンテーション（自己紹介） シラバスを踏まえつつ事前学習、現地実習、事後学習という授業全体の流れを説明。フィールドワーク中に出会うさまざまな人々と出会う場面を想定した自己紹介ワークショップを実施。
2	マレーシアについてのゲスト講師からの講義 戸加里康子氏をゲストスピーカーとしてお招きし、マレーシアおよびサバ州の歴史、社会的状況に関する導入的講義を実施。
3	自主的研究課題について検討 現地実習のスケジュールを共有し、多文化共生・教育・環境の 3 つのテーマに分かれて、現地での自主的な調査活動についてディスカッションを実施。

4	フィールドスタディの心構え① 　現地の人々と外部の人々が協働して地域について考える観察と情報収集の方法論について地元学をモデルとしつつ講義をおこない、吹田キャンパスをフィールドとしてワークショップを実施。
5	フィールドスタディの心構え② 　学外実習が現地へ及ぼす悪影響として「迷惑をかけること」を主題として、インタビュー実習を実施。聴き取った内容について整理し、自分が何者であるか、どのような趣旨でおこなわれるものか、インタビューはどのような雰囲気でおこなわれたか等について報告し、インタビューされた本人からの批評を含むフィードバックをおこなった。
6	マレーシアに関する現地団体による講義 　受入団体 CFF Japan の方々をゲスト講師として招き、マレーシアおよびサバ州に関する背景知識や現地の課題について事前講義を実施。
7	健康管理についてのゲスト講師酒井規夫教授（大阪大学医学系研究科）からの講義
8	危機管理について日本エマージェンシーアシスタンス株式会社からの講義

　海外実習は 2024 年 2 月に、マレーシアのコタキナバルにて 10 日間行った。そのうち現地参加者は 2 日目から 9 日目まで活動を共にした。活動内容を表 2 に示す。

表 2：海外実習スケジュール

日数	活動
1	午前：関西空港出発
	午後：移動
2	午前：コタキナバル市近郊の無国籍者集落訪問
	午後：無国籍者問題に取り組む現地活動団体からの話題提供（Lee Ting Hwong 氏（Elshaddai Sabah）、白石達郎氏（アノテーションサポート株式会社）
3	午前：ヌンバック水上集落および Numbak Educare Centre への訪問
	午後：アートコレクティヴ Pangrok Sulap 拠点への訪問
4	午前：コタキナバル市立モスク視察・移動
	午後：テルピッド村でのホームステイ開始
5	午前：テルピッド村周辺のアブラヤシ農園視察
	午後：人とゾウの共生に取り組む現地団体（Forever Sabah）視察
	夜：テルピッド村でのピースセミナーへの参加
6	午前：ホームステイ終了・移動
	午後：クンダサン戦争記念碑視察

7	午前：移動
	午後：CFF マレーシア拠点児童養護施設「子どもの家」視察・発表準備
8	午前：「子どもの家」にて現地実習に関するプレゼンテーション
	午後：「子どもの家」の子供たちとの交流
	夜：移動
9	午前：コタキナバル市自由行動
	午後：移動
10	午前：関西空港到着

以下では各日の活動概要を記す。

2日目にはサバ州の難民、無国籍者問題に長年取り組んでいるElshaddai Centre Sabahの協力のもと、彼らが支援するコタキナバル近郊の無国籍者集落および集落内の学習センターを訪問した。サバ州の無国籍者人口は正確な統計を出すことは難しいが、Lee 氏によればおよそ 100 万超であり、これは州人口の三分の一に迫るものである。無国籍者の多くは国境を接するインドネシア、フィリピンの移民およびその子孫であるが、そのなかにはミンダナオ内戦による難民も多い。学校や病院にもいけず、低賃金で不法就労をせざるをえず、警察に逮捕、排除されうる極めて不安定な生活を強いられている。集落の訪問後、現地で無国籍者支援にかかわる Elshaddai Centre Saba エリアコーディネーターの Lee Ting Hwong 氏、アノテーションサポート株式会社代表取締役の白石達郎氏から現地の社会状況やこれまでの取り組みについて話題提供を受けた。地域で教育、ヘルスケア、スキル訓練を中心とした支援をおこなう Lee 氏と、フィリピンでの雇用創出と国籍取得によるマレーシアの無国籍問題の解決を目指す白石氏との対話は、研修全体で考えるべき社会課題の複雑さや必要となるビジョンの大きさを伝えるものであった。

3 日目午前中はコタキナバル北部のヌンバックへ向かい、Numbak Educare Centre を視察し、また水上集落の家庭を訪問した（写真 1）。マレーシアで公教育を受けるためには Identity Card を有している必要があるが、非マレーシア民の子供たちに滞在許可書類がなく、高額な私立学校へ通う経済的な基盤も存在しない。Numbak Educare Centre は 2011 年に UNICEF の支援によって設立され、主に地域の 6～12 歳の無国籍のこどもたちを対象として教育をおこなっている。参加者は行政担当者からの情報提供、センターの教員や子供たちとの交流、家庭訪問を通して、現地の教育や暮らしの状況について初日とは異なる地域課題のあり方について知ることとなった。また午後にはサバ州ラナウで結成されたアートコレクティヴ Pangrok Sulap の拠点 Ruang Tamu Ekosistem を訪問し、現地での取り組みやその国際的な活動についてヒアリングを行った（写真 2）。Pangrok は音楽のジャンルである「パンクロック」、Sulap はサバ州の農民が使用する休憩小屋を意味している。アーティスト、ミュージシャン、社会活動家など多様なメンバーで構成される

Pangrok Sulap の活動は多岐に渡るが政治的退廃に抗しながら、地域コミュニティや住民とともに彼らの直面する課題を描き出そうとする彼らの試みは「社会課題解決」に取り組もうとする参加者らを大いに触発するものだった。

写真 1

写真 2

4～6 日目にかけての研修はサバ州内陸部のテルピッドでおこなわれた。この間、参加者は現地の 4 つの家庭でホームステイをおこなった。テルピッドでは学生のホームステイ受け入れははじめてとのことだったが、到着後から伝統的な音楽と舞踊によるセレモニーで歓迎され、温かく迎え入れられた。多くの大阪大学からの参加者にとって言語や文化の異なる地域でのホームステイははじめての経験であり、コミュニケーションはそれ自体大きなハードルだったかもしれない。しかし、「お客様ではなく、家族の一員として」食事の準備を手伝ったり、互いの文化について紹介しあったり、地域の子供たちとバレーボールをしたり、短い滞在のなかで現地の暮らしを体験する時間はフィールドスタディにおいて貴重な経験であっただろう（写真 3,4）。

写真 3

写真 4

5 日目はまず地域の重要な産業であると同時に、森林伐採や土壌汚染という環境問題を引き起こすと一般的に指摘されているパーム油を生産するアブラヤシプランテーションを訪れた。プランテーションと一口に言ってもその状況はさまざまであるが、今回の視察では家族経営の小規模農家と Malaysian Sustainable Palm Oil（MSPO）認定を取得し

ている大規模プランテーションを視察することができた。実際に各々の現場スタッフからの情報共有ならびにインタビューをおこなうことで参加者は経営、雇用状況や環境問題に関する意識などプランテーションが社会のなかでもつ意味について理解を深めた（写真 5, 6）。また午後にはサバ州で環境保全に取り組む財団「Forever Sabah」のもとで働く Community Elephant Ranger Team を訪問し、テルピッド地域の住民とゾウのコンフリクトを軽減し、共存を果たすために取り組んでいる様々な対策の現場を視察した。実際にゾウの痕跡を調べるフィールド生態学調査の方法を体験し、ゾウの食物として植樹している果樹の苗の植え替えを体験した（写真 7）。5 日目の夜にはテルピッドでの滞在をアレンジしてくださったハビス・マディン牧師によるピースセミナーに参加した。セミナーではまずテルピッド村を含む北ボルネオ地域が旧日本軍の侵攻の被害を受けた事実が共有された。その上で、加害国から来た学生と被害国であるマレーシアの住民が和解することの重要さが説かれた。学生たちはテルピッド村の住民と戦争について話し合い、両国の関係を考える上で避けては通れない暗い歴史について向き合った（写真 8）。6 日目はクンダサン戦争記念公園の視察をおこなった。ここでの展示は主に「サンダカン死の行進」についてのものである。太平洋戦争末期、旧日本軍は 1945 年に拠点をボルネオ東海岸から西海岸へ移動させることを決定、その際、強制労働をさせられていたオーストラリア軍、イギリス軍の捕虜を十分な食料や装備もないままジャングルを徒歩で移動させ、その途上で脱走した 6 名を除く、ほぼすべての捕虜や多くの民間人を死亡させたのであった（写真 9）。旧日本軍による戦争犯罪についてのメモリアルは前日のピースセミナーから引き続き参加者へ問いを投げかけるものであっただろう。

写真 5

写真 6

写真 7

写真 8

7～8 日目には、児童養護施設「子どもの家」のあるパパールへ移動し、施設の視察や子供たちとの交流をおこなった。「子どもの家」は CFF マレーシアの拠点であり、サバ州各地から保護者のいない子供や虐待を受けた子供たちが集まり、共同生活を送っている。子供たちは公立学校へ通いながら、「子どもの家」と周辺地域コミュニティのなかで生活し、5 つのケア（自己、他者、コミュニティ、環境、未来）を柱とした多種多様な自立支援プログラムを経ていくことになる。複雑な社会課題の解決には長期的な実践が不可欠であり、「子どもの家」も設計や運営、プログラム内容についても環境的・経済的・社会福祉的なサステナビリティを掲げている。FS 参加者らは敷地内の研修宿泊施設に滞在し、子供たちやスタッフ、地域住民の方々と交流しながら、CFF の社会的課題への具体的な取り組みを体験した。そして、8 日目にはこれまでの研修内容を踏まえて、多文化共生、教育、環境という三つの視点から「今回出会った社会課題について複数の視点から記述し、自分がどのようにかかわっているか」について最終プレゼンテーションをおこなった（写真 10）。

写真 9

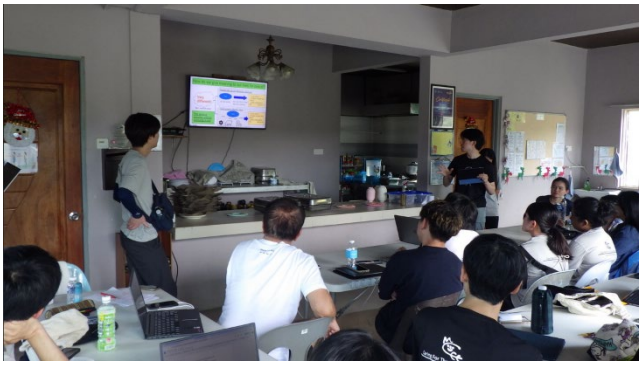

写真 10

2.2 アンケート調査

高度汎用力の変化を見るために、Google フォームによるアンケートを行った。具体的には事前学習の 11 月に「事前アンケート」、出発直前に「直前アンケート」、帰国後の 3 月に「事後アンケート」を行った。内容は高度汎用力についての 10 項目であり、「高度な

専門的知識・研究能力」「専門分野以外の幅広い知識」「高い国際性・語学力」「プレゼンテーション能力」「物事を俯瞰し本質を見抜く力」「独創的な視点で自ら課題を設定する力」「ディスカッション能力（立場や専門を超えて議論する力）」「独創的な解決策を構想する力」「問題解決の実現に挑む力（企画立案する力、関係者と調整する力）」「チームのマネージメント力（他者と協働する力、統率する力）」である。各項目について、「１：弱点であり、悪影響が出ている、２：弱点である、３：普通／当該学年としては妥当、４：良／十分な相対優位性、５：優／ハイパフォーマー」の 5 件法の自己評価で回答する形式とした。

2.3 ふりかえりシート

現地滞在中はその日の活動をふりかえり、自身の学びを深めつつ、互いの経験を共有すること、また事後学習での報告書作成時の記録を目的に、毎日ふりかえりシートを配布し、記入を求めた。質問は①新たな発見や価値観の違い、興味の深まりについて、②発見した新たな課題とその解決策について、③自分の研究や将来の職業に関連した考えについて、④良かったこと、良くなかったことについて、の 4 項目であり、いずれも自由記述形式とした。

2.4 分析

高度汎用力に関するアンケート結果については R Studio ver. 2023.12.1 を使用し、フリードマン検定を行った。主効果が認められた場合は下位検定としてウィルコクソンの符号順位検定を行い、ボンフェローニ法で補正を行った。有意水準としては p 値が 5%未満を有意に差があると、5%以上 10%未満を有意傾向とした。

ふりかえりシートについては、学生が実習を通して何を得たのかや、どのような印象を受けたのか質的データから定量的な分析を行うために、KH Coder3（樋口，2020）を用いて、計量テキスト分析を行った。計量テキスト分析とは、文章に含まれる質的データを定量的に解析する統計的解析手法である。本研究では、移動日を除く、2 日目から 8 日目までの 7 日間のシートのうち、日本語で書かれた文章のみを取り出して分析を行った。分析の際は、総抽出語のうち、助詞や助動詞などを除いた語を分析に使用し、質問に対する学生ごとの回答を一段落とした。また、語を抽出した際に誤字を修正し、同じ語の異なる表現を統一した（例えば、「子ども」と「子供」を全て「子供」に、「ゴミ」と「ごみ」を全て「ゴミ」とした）。語と語のつながりは共起ネットワークを作成することで、単語同士の共起性を調べた。

3. 結果

3.1 対象者

実習参加者のうち本研究対象者 10 名は男性 8 名であり、所属は人間科学研究科や人文学研究科などの文系の研究科、そして工学研究科や情報科学研究科など理系の研究科など様々であった。

3.2 高度汎用力

事前、直前、事後における高度汎用力の変化を表 3 に示す。フリードマン検定の結果、「高度な専門的知識・研究能力」、「高い国際性・語学力」において有意な主効果が認められ（それぞれ $p = 0.03$、$p = 0.02$）、「プレゼンテーション能力」には有意傾向が認められた（$p = 0.07$）。その後の検定によると、事前から直前にかけて「高い国際性・語学力」は有意な上昇（$p = 0.03$）、「高度な専門的知識・研究能力」、「プレゼンテーション能力」は上昇傾向（どちらも $p = 0.06$）が認められた。一方、直前から事後にかけて有意な変化は認められなかった。

表 3：高度汎用力の変化

	事前	直前		事後
高度な専門的知識・研究能力	2.8 (0.7)	3.7 (0.9)	†	3.5 (0.7)
専門分野以外の幅広い知識	3.1 (0.9)	3.6 (0.8)		3.6 (1.0)
高い国際性・語学力	2.7 (0.9)	3.3 (0.5)	*	3.5 (0.9)
プレゼンテーション能力	2.8 (0.7)	3.4 (0.7)	†	3.2 (0.4)
物事を俯瞰し本質を見抜く力	3.1 (0.7)	3.5 (0.5)		3.1 (0.9)
独創的な視点で自ら課題を設定する力	2.9 (0.9)	3.0 (0.8)		3.1 (0.9)
ディスカッション能力	3.2 (0.6)	3.4 (0.5)		3.6 (1.1)
独創的な解決策を構想する力	3.0 (0.6)	3.3 (0.5)		3.0 (0.8)
問題解決の実現に挑む力	3.2 (0.9)	3.4 (0.8)		3.0 (0.4)
チームのマネージメント力	3.3 (0.5)	3.4 (0.7)		3.6 (0.8)

データは平均値（標準偏差）. * $p < 0.05$, † < 0.1 vs 事前

3.3 ふりかえりシート

ふりかえりシートにおける、質問 1〜4 の抽出語、異なり語、文、段落の数を表 4 に示す。

表 4：ふりかえりシートの抽出語、異なり語、文、段落の数

	抽出語数	異なり語数	文数	段落数
質問1	14971（5817）	2311（1950）	384	67
質問2	6248（2462）	1169（935）	146	54
質問3	6464（2581）	1277（1049）	161	58
質問4	6186（2380）	1162（934）	166	66

抽出語数、異なり語数のデータは総数（使用数）.

3.4.1 質問 1「新たな発見や価値観の違い、興味の深まり」

質問 1 の抽出語のつながりに基づいて KH Coder3 によって作成した共起ネットワークを図 1 に示す。各抽出語が含まれる円（頂点）のサイズは出現頻度を、濃さは媒介中心性を、線（辺）の太さは共起関係の強さを示している。媒介中心性とは、２つの円の間を最短経路で結んだ全ての組み合わせにおいて、ある円が経路上に現れる頻度のことであり、高い中心性を示す単語はよく他の単語の間に現れることを示す。

媒介中心性が最も高かったのは「環境」であり、次いで「マレーシア、子供、住民、教育、人々、自分」の中心性が高かった。すなわち、学生たちはマレーシアに滞在した経験について、環境、子供や住民、教育といった単語を介して多く記述していた。また、それらを「自分」とも結び付けて考えていたことが窺える。

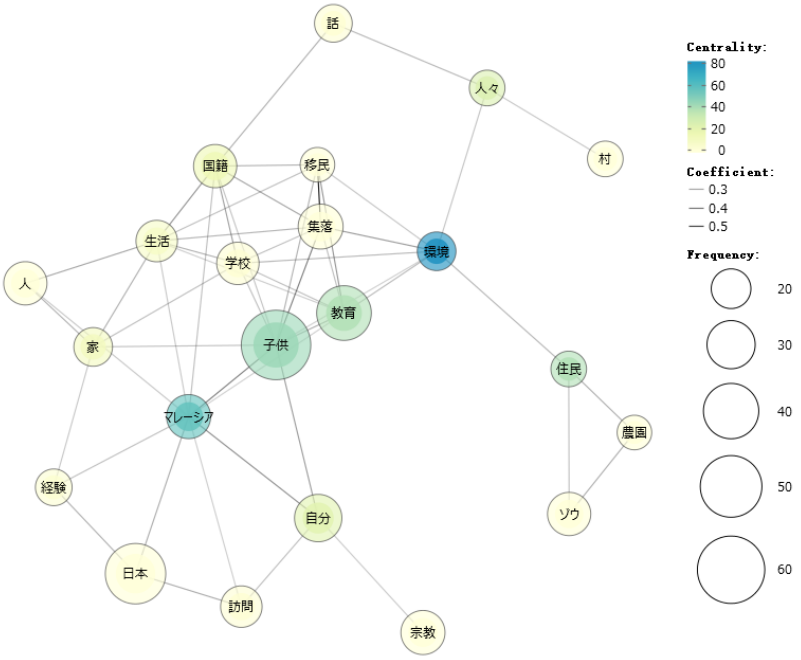

図 1：質問 1「新たな発見や価値観の違い、興味の深まり」の共起ネットワーク

例：

“午前中に行った移民集落に住んでいる子供たちとの交流と午後のセッションを通じて、環境問題をはじめとする諸問題の重要性を認識することの難しさを強く実感した。地面に落ちているゴミを見て、その事実が環境に悪影響を与え、最終的に自身の健康被害に繋がることを私たちが認識できるのは、それが自身の享受してきた教育によって形成された価値観によるものである。これは、私が参加している社会を創り上げる段階で先人が身をもって体験し、後世に伝える努力を怠らなかったからである。そのため、我々が「在る」と

認識する事実を他の社会の構成員が「在る」と認識するように働きかけること、そしてそれが「良いこと」であると実感してもらうことは、その社会の根本を変革していくことであり、多大な時間と果てしない努力を要するものである。今日の活動を通じてその難しさを感じ、こうした社会の認知の変革に成功した事例について深く学びたいと思った。”

“子どもたちと英語がある程度通じることに驚いた．というのも自分が彼らの年齢ぐらいの時に 2 ヶ国語を話せたとは思わないからである．マレーシアは世界的にも英語が優秀な国であるとは知っていたが，教育の充実が背後にあるのではないかと考えた．“

“まず，環境面の日本との違いにかなり驚いた．今のサバは乾期で，例年のことながら水不足が深刻だという．皿を洗う水ももったいないので，皿の上に紙のシートを敷いて使い捨てられるようにしていた．水道水も足りておらず，蛇口をひねっても水が出てこないような状態らしい．そんな中，雨水を貯めたり，地下水を採取したり，限られた資源の中で生活を維持するために工夫を凝らしていることに衝撃を受けた．“

3.4.2 質問 2「発見した新たな課題とその解決策」

質問 2 についての共起ネットワークを図 2 に示す。共起性の高い語の組み合わせを、抽出語同士の結合であるサブグラフより、学生は以下の 3 つの課題に対して興味を持ったことが分かった。

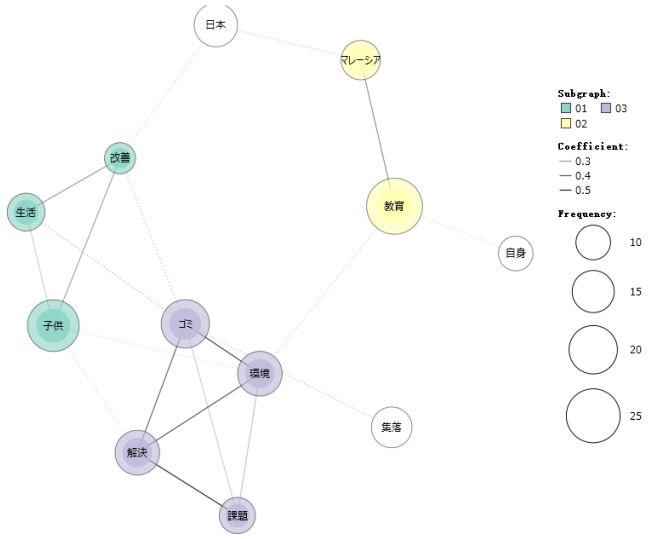

図 2：質問 2「発見した新たな課題とその解決策」の共起ネットワーク

一つ目は、子供の生活改善に関する課題である。

例：

“ムスリムの子供にのみ政府による支援が行われていることから、主にキリスト教の子供を受け入れ政府による支援なしで運営を行っているとのことだった。街中ではモスクと協会が共存し、国民もある程度互いを受け入れて共生をしている印象を抱いていたが、なぜキリスト教の子供には支援がないのか。日本に戻って詳しく調べる必要があると感じた。”

“子供たちのホスピタリティはどの程度が望ましいのか．CFF マレーシアは多くの人が訪れ，子供たちと接する場所であり，そのため子供たちがホスピタリティを持つようになったとすれば，それは良いことなのか．”

二つ目は、マレーシアの教育に関する課題である。教育内容だけでなく、教育により何が変えられるか、また、なぜ教育がうまくいかないか、といった社会的な側面についても回答の中で触れられていた。

例：

“言語について公教育が教えるべきなのか、外国人学校が教えるべきなのかを考える機会となった。マレーシアや日本以外の国で公教育と外国人学校のせめぎ合いはどうなっているのかが気になった。”

“ホームステイ先にクンダサンで先生をしている方がいたのでマレーシアの教育について自身が抱えている問題をお伺いしたところ、先生たちが動いても学校側から許可が下りなくて実施できないことがあるのが問題かもしれないといわれた。（ex. 交換留学生の受け入れ）また、第一言語がマレー語ではなく中国語などになっているのもキャリア上あまり良くないかもしれないと言っていた。これは国レベルで学習指導要領を考える必要があるのではないかと思う。”

三つ目は、環境問題、特にゴミ問題である。

例：

“私たちは環境問題について取り組み、移民集落ではゴミ問題が深刻であった。集落内の地面には無数のプラスチックやアルミ缶のゴミが落ちており、悪臭や不衛生な環境での健康被害が心配された。これに対して当初は「とりあえずゴミ箱を設置するべきではないか」と思っていたが、彼らにとってはゴミを地面に捨てるのが常識であり、ただゴミ箱を設置しても根本的な解決策にはなっていないことに気がついた。不衛生がもたらす健康被

害に関する教育を充実させたり、ゴミを集めることに何かしらの付加価値を見出せるようなシステム作りが解決のための一歩だと思った。”

3.4.3 質問 3「自分の研究や将来の職業に関連した考え」

質問 3 について、抽出語と各学生との関係性は図 3 にて示す。四角内の番号は学生一人一人を示している。学生は、マレーシアで観察したことや経験、発見した課題を自分自身の専攻や研究と結びつけていたことが伺えた。

例：

“自然環境保全や野生動物保護について、個人的に、普段は、行政の政策や計画の観点から考察することが多いため、「法」や「政策」というと、そのようなもの（行政によるもの）が思い浮かぶが、「サバにおいて、ゾウに関する法や政策はありますか」とレンジャーの方に質問したところ、自らの団体の「ゾウに敬意をもって活動を行う。例えば、森に入ったら、ゾウのことは AKI と呼ぶし、礼節をもった態度で行動する。」というポリシーを真っ先に回答した。この瞬間に、私とレンジャーの間に関心のズレ、文脈のズレがあることを認識した。自分の研究において、自然の権利や動物の権利に触れる機会が多いが、実際にそれらに近い考えを非常に重視している人々に出会い、大変興味深かった。”

“白石さんが現在行っているソーシャルビジネスが，アノテーション代行サービスであることも印象的だった．情報技術の持つ，空間を超える力がいかに強力か，自身の専攻の価値を再認識した．一方で，デジタルディバイドの問題も深刻である．紹介された例の，帰国できた家族のお母さんも，パソコンの使い方が最初はわからなかったという話だった．どれだけ良い技術や環境が開発されても，それが届かない人々が世界にはいて，その人々をどのように取り込んで，全員にとってアクセス可能にするかも，情報科学技術分野の重要な課題だと思った．”

“妊婦の未受診、自宅出産について。保健学専攻として、日本でもその問題には触れていた。しかし無国籍民の妊婦における未受診や自宅出産については全く異なる視点が必要であることに気が付いた。今後看護師としてのキャリアを考えていくうえで、広い視野を持つことは非常に重要だと考えている。明日以降も、これまでにない経験をすることで新しい視点を得られると思うので、今後の研究や職業に関連させた視野を持てるよう意識して取り組んでいきたい。”

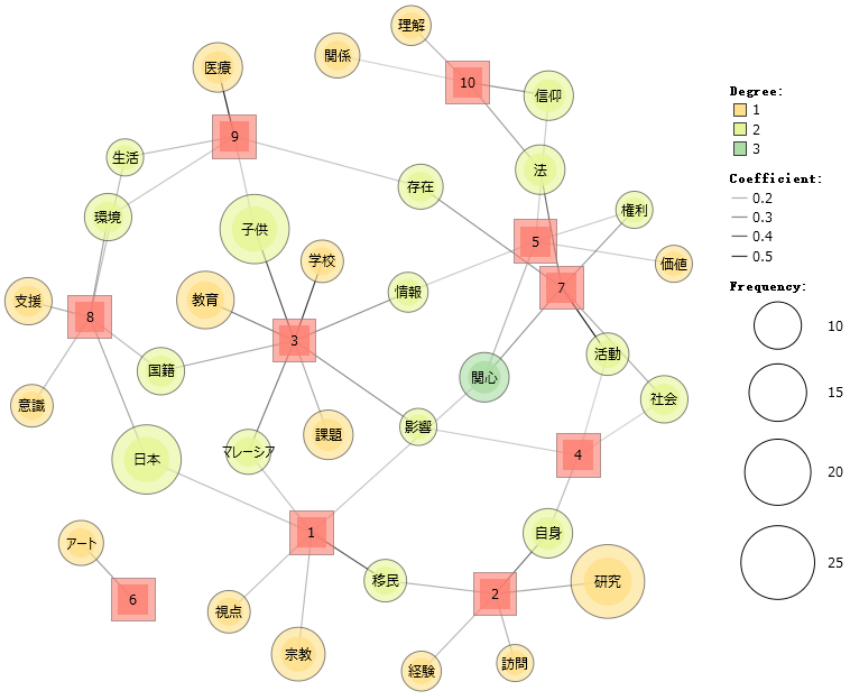

図 3：質問 3「自分の研究や将来の職業に関連した考え」の共起ネットワーク

3.4.4 質問 4「良かったこと、良くなかったこと」

質問 4 についての共起ネットワークを図 4 に示す。回答より、学生たちが FS を通して得た収穫と直面した困難が明らかとなった。分析により 5 つのサブグラフが生成された。学生の収穫と困難は以下の通りである。

収穫：

① 戦争を乗り越えて、マレーシアと日本が交流することの重要性

② 集落や宗教の話題について、ディスカッションすることの良さ

困難：

① マレーシアの村に訪問した際に、人々との会話や質問の困難さ

② ホームステイ先などで子供とコミュニケーションをするときの言語面での難しさ

③ 発表の多さ

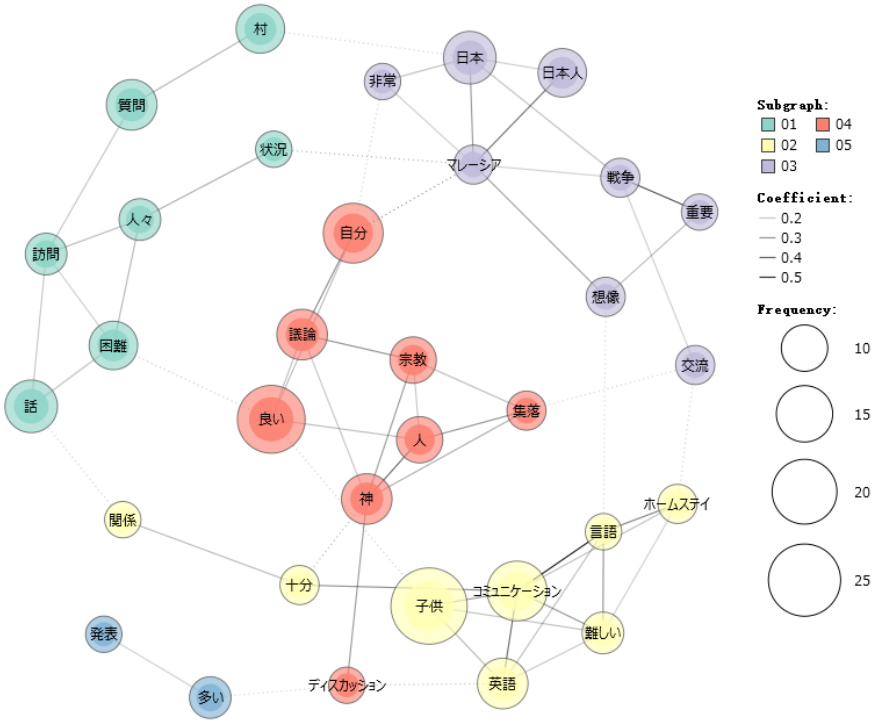

図 4：質問 4「良かったこと、良くなかったこと」の共起ネットワーク

次に、この質問の回答の中で、形容詞と形容動詞が多く使われていたため、表 4 のコーティングルールに従って、活動日と学生の感情のクロス分析を行った。

表 5：質問 4 のコーディングルール

感情	該当語
ネガティブ	ネガティブ or 残念 or 不快 or 迷惑 or 不安 or 悪い or 辛い or 憎い or ダサい or 汚い or 悔しい or 恥ずかしい or 悲しい or 困難 or 難しい or タイト or タフ or 厳しい
ポジティブ	新た or 絶妙 or 活発 or 豊か or 気軽 or 貴重 or 好き or 素敵 or 着実 or 丁寧 or 有意義 or 良い or 優しい or 楽しい or 興味深い or 暖かい or 美味しい

クロス分析を行った結果は図 5 に示す。四角の大きさは出現割合を、色は相関性を表しており、赤は相関性が高く、青は相関性が低いことを示す。

ポジティブな感情の出現割合は特に 4 日目に高かったが、ネガティブな感情も同様にたかった。この日はホームステイの開始日であり、特にホームステイ先でのコミュニケーシ

ョンの取り方について、思ったよりもコミュニケーションが取れたと感じる学生がいた一方で、質問の方法や語学力などに反省を感じた学生もいたことが伺える。

例：

“他の家にホームステイしている学生や家族も含めて，バレーボールやサッカーで遊んだ．中にはまだ小さくてマレー語しか話さない子もいたが，ボールを蹴りながらなんとなくでもコミュニケーションが取れたのはとても良かったと思う．スポーツが言語の壁を越えてくれる場合があることを知った．”

“良かったこととしては，テルピッド村に着いた時やホームステイ先でも積極的に交流をしようと動けたことが良かったと思う．しかし一方で，ホームステイ先において先生のアシストを受けて初めて家事を手伝おうとしたり，質問を投げかけようとするなど受動的な行動をしてしまったことが良くなかったと感じる．”

また、ネガティブな感情は 5 日目に最も高かった。特に夜のピースセミナーについての記述が多く見られ、戦時中のマレーシアと日本との関係について知り、学生たちが衝撃を受けたことが伺える。

“外から見た日本の一面を垣間見ることができたと感じている。教会でのピースセミナーは、形容しがたい居心地の悪さがあった。しかしこの感覚を決して忘れてはならない。〔.....〕［マレーシアの人々は戦争について「過去は過去だ」と述べていたことについて］私たち日本人はこの言葉に甘んじてはいけないと思う。“

“戦時中に日本軍が行ったことは全然知らなかった．そういった経緯を踏まえずに，マレーシアの人々が日本人に対してどのような感情を抱いているのか想像もせずに，こうしてやってきてしまったことを後悔した．“

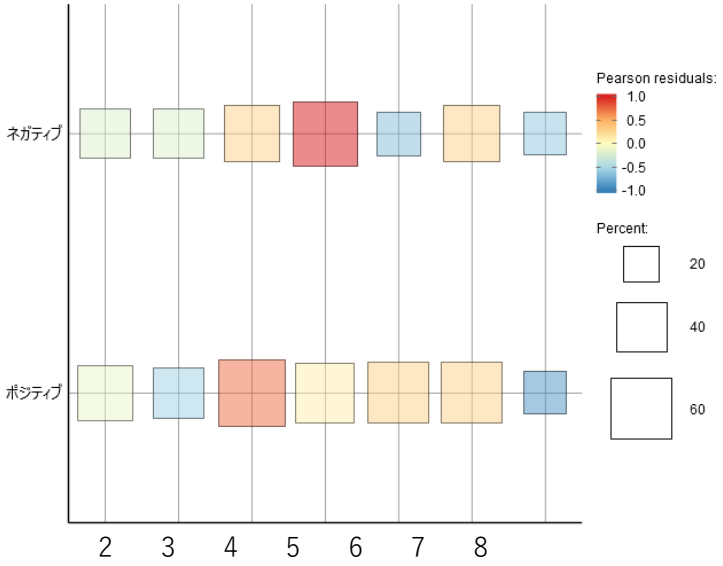

図 5：活動日と学生の感情のクロス分析

考察

本研究ではマレーシアにおける海外実習および事前学習により、学生の高度汎用力がどのように変化するのか、そして何を得たのかを分析した。

まず事前事後の高度汎用力に関する調査についてである。事前学習後の調査では「高い国際性・語学力」、「高度な専門的知識・研究能力」、「プレゼンテーション能力」が上昇していた一方で、海外実習後の調査では「独創的な解決策を構想する力」「問題解決の実現に挑む力」なども含めていずれの能力においても上昇は認められなかった（表 3）。まず指摘できるのは事前学習で得られたポジティブな効果である。つまり、マレーシアについての知識や社会課題についてのディスカッションをおこなうことで、それまで知らなかった知識や異分野の参加者との協働の経験が得られたことが自覚されている。

では、マレーシアの人々と自身の生活や環境との相違に直面し向き合ったにもかかわらず、事後アンケートにおいて能力の上昇が認められない、という事態をどのように捉えればよいだろうか。

まず今回の参加者は、異分野混成の大学院生であり、しかもそのほとんどがマレーシアを含む東南アジア地域での調査を専門とするわけではなかったので、高度汎用力の向上は、すぐには自覚しにくいかもしれない。しかし、ふりかえりシートの「自分の研究や将来の

職業に関連した考え」に関する質問より、参加者は農村地域における自然や動物の権利や、情報技術の持つ力、妊産婦の未受診や自宅出産の問題など、海外で様々な人や団体との出会いに、各自の専門性を結びつけることで深めることができたことが窺えた（図 3）。また、「新たな発見や価値観の違い、興味の深まり」、「発見した新たな課題とその解決策」に関する質問ではマレーシアの子供の生活や教育、環境問題について、自身の生活や経験と比較して記述されていたものがあった（図 4）。こうしたことから指摘できるのは、少なくとも現地での学習を通して、新たな発見や思考が生まれたということである。

その上で、おそらく指摘すべきは現地での気づきは同時に、現地での様々な施設の訪問やホームステイ体験、そして英語やマレー語での交流が、むしろ事前にいだいていた現地の社会課題についての想定や、自分自身の知識や能力とのギャップに向き合う契機だったということである。また、これらのギャップ、特にフィールドワークの初体験や英語の挑戦との重なりのため、課題解決能力の向上を実感しにくくなる可能性が高い。たとえば参加者の海外実習中の感情の分析は、特にホームステイ中に村の人々との交流を通して異言語コミュニケーションの難しさに直面していたということを示している（図 5）。特にマレーシアと日本の戦争の歴史についてはじめて現地で語られた学生は居心地の悪さや衝撃を感じていた。事前学習でもマレーシアの歴史について学習してはいたものの、実際に当事者から話を聞くインパクトの大きさがうかがえる。これは既存の研究でも検証されており、Davis & Knight (2021)は、本土と渡航先との文化的距離や、言語の壁、歴史的環境の差異などが学生のフィールドスタディの経験や学習成果に影響を与えると指摘している。また鈴木（2018）は短期大学生を対象としたニュージーランドでの海外研修において、学生が記録した研修日誌のテキスト分析をした結果、すべてが「おもしろい」や「良い」といった、よい印象を表す肯定的なキーワードで構成されていることを報告している。本研究では「不安」や「困難」といったネガティブなキーワードも出てきていたが、これは鈴木（2018）の研修では幼稚園や保育園での交流活動や博物館や植物園、工場の見学が行われていた一方で、本研修では深刻な社会課題が発生している現場の見学だけでなく、当事者から聞き取りを行い、最終的には解決策の提示までを学生に求めたことから、自身の無力感を感じ、「悔しい」や「困難」、「迷惑」といったネガティブなワードにつながったと考えられる。これらは研修の体験そのものがネガティブにとらえられたわけではなく、学生らが自らのキャパシティを超えた大きな課題を目の前にして苦しんで考えた痕跡であろうと考えられる。

参加者は事前学習であらかじめ社会課題について検討してはいたが、海外実習での現地での経験により新たな価値観や社会課題を発見し、現地での課題に対して現実的に向き合うことになったわけである。とはいえ、この新たな課題の発見という段階は、いまだ現地で自ら課題を設定し、解決策を構想するに至っているわけではなく、能力の上昇は実感していなかったのだろう。箕曲ら（2021）はフィールドワークを通じて涵養される能力（コンピテンシー）として、共有概念をフィールドの社会的状況に埋め込んで解釈すること、

偶発性に身を委ねて新たな気づきを得ること、自己の省察をすることで既存の世界観を相対化することに分類している。箕曲ら（2021）はしばしばフィールド実習での学びが事後的に紋切り型の成長物語に回収されてしまうことへの懸念を示している（箕曲 2021, p. 57）。むしろ、現地での実習に求められるのは、学生たちが現地で見聞きする事象を現地の社会的文脈に埋め込みながら探求し、予期せぬ出来事に遭遇しながらも、自身がもつ既存の価値観を相対化、再構成することで、最終的に自己変容を遂げることだとされる。本実習において確認された自己評価が高まらない、あるいは低下するといった一見ネガティブな効果は、高度教養を養成されるフィールド実習においては不可避的な自己変容の機会であると指摘することはできるだろう。海外での経験が学生に与える影響は、すぐに現れる場合もあれば、時間をかけて徐々に現れる場合もある。こうした経験が自身に与える影響を消化して理解するには時間がかかるため、短期間で能力の向上を的確に表現するのが難しい場合がある（Wong, 2015）。そのため、教員が意図的に学生を導き、自らの経験を深く理解し、自身の変化を実感できるようにサポートすることが重要になる。超域イノベーション博士課程プログラムでは社会課題解決をテーマとするPBL科目が継続的にカリキュラムに組み込まれており、フィールドスタディの終了後にも同時並行的に多くの科目の履修がおこなわれている。先行研究でも「課題の解決策を立案する力」や「課題解決の実現に挑む力」については限られた実習期間での能力育成は困難であることが示唆されているが（金森・三田, 2019）、こうした力については科目横断的に長期的な視点で検討、評価をしていく必要があると考えられる。

今回の FS ではマレーシアにおける社会課題について事前学習と海外実習をおこない、高度汎用力の向上に関する事前事後アンケートを実施し、量的な分析をおこなった。3度おこなった自己評価の変遷からは自ら課題を設定する力や課題策を構想する能力といった高度汎用力が上昇したという自己評価は認められなかったものの、毎日のふりかえりの記述から、学生たちは自身の生活や環境とは異なる国に滞在し、現地の方々と交流した経験を元に、新たな課題を見つけるためのスタートラインに立ったことが窺える。こうした実習の教育効果については、参加者による主観的な自己評価ではない、第三者による客観的な評価手法や長期的な影響の追跡調査手法についても検討する必要があるだろう。

今後に向けて、上記の検証結果は海外フィールドスタディのデザインにおいても重要な示唆を与える。まず、事前学習の重要性が確認されたことを受け、その役割をさらに強化すべきだと考えられる。例えば、渡航先に関する知識の習得だけでなく、フィールドワークの手法の紹介や実践の機会、渡航先のパートナーと学生とのコミュニケーションを増やし、チームとしての協力的な関係を事前に構築することが挙げられる。次に、海外フィールドワークと PBL という 2 つのテーマが混在していたため、実施の際、学生は多くの困難に直面し、学生が自らの能力の向上を実感しにくくなる場面も見られた。一方で、学生たちは帰国後、約半年間をかけてディスカッションを行い、最終的にレポートをまとめた。この期間は、まさに学習効果を自覚させ、さらに向上させる機会であるため、その期間中

のフォローアップや指導が重要だと言える。

謝辞

海外フィールド・スタディ実施にあたり、多大なるサポートを頂きました、CFF Japan の安部光彦氏、内海研治氏、戸加里康子先生、辻田俊哉先生およびマレーシアでの訪問先でご協力いただいた方々に感謝申し上げます。特に、マレーシアで我々の訪問とホームステイを快く受け入れてくださった地域コミュニティの方々へ深く感謝いたします。

文献

Davis, K.A. and Knight, D.B. (2021) Comparing students' study abroad experiences and outcomes across global contexts, International Journal of Intercultural Relations, 83, 114-127.

樋口耕一（2020）社会調査のための計量テキスト分析: 内容分析の継承と発展を目指して(第 2 版). ナカニシヤ出版.

金森サヤ子・三田貴（2019）海外フィールドスタディを通じた学習成果と高度汎用力育成の可能性. Co＊Design, 5, 25-43.

箕曲在弘・二文字屋脩・小西公大（2021）人類学者たちのフィールド教育: 自己変容に向けた学びのデザイン. ナカニシヤ出版. 188 頁.

鈴木 薫（2018）ニュージーランド体験型海外研修プログラムの検証：テキストマイニングによる研修日誌の解析. 名古屋学芸大学研究紀要.教養・学際編, 14. 1-20.

Wong, E. D. (2015) Beyond "It was Great"? Not so Fast!, Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad, 26(1), 121–135.

泰松範行（2023）教育旅行を教育課程においてどのように位置づけるのか ：教育目標の設定とルーブリックの活用からプログラムを考える. 東洋学園大学紀要, 31, 231-243.

（投稿日：2025 年 3 月 27 日）
（受理日：2025 年 4 月 23 日）

Co* Design NOTE
Center for the Study of Co* Design, Osaka University

No.07 2025 年 5 月 16 日

定量分析による海外フィールド・スタディの高度汎用力育成効果の検証：マレーシアにおける海外研修プログラムの事例報告

大阪大学 CO デザインセンター

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-16
大阪大学豊中キャンパス全学教育推進機構 全学教育総合棟 I（4 階）
TEL: 06-6850-6111（代表） https://cscd.osaka-u.ac.jp/

CENTER FOR THE STUDY OF CO* DESIGN

大阪大学 OSAKA UNIVERSITY